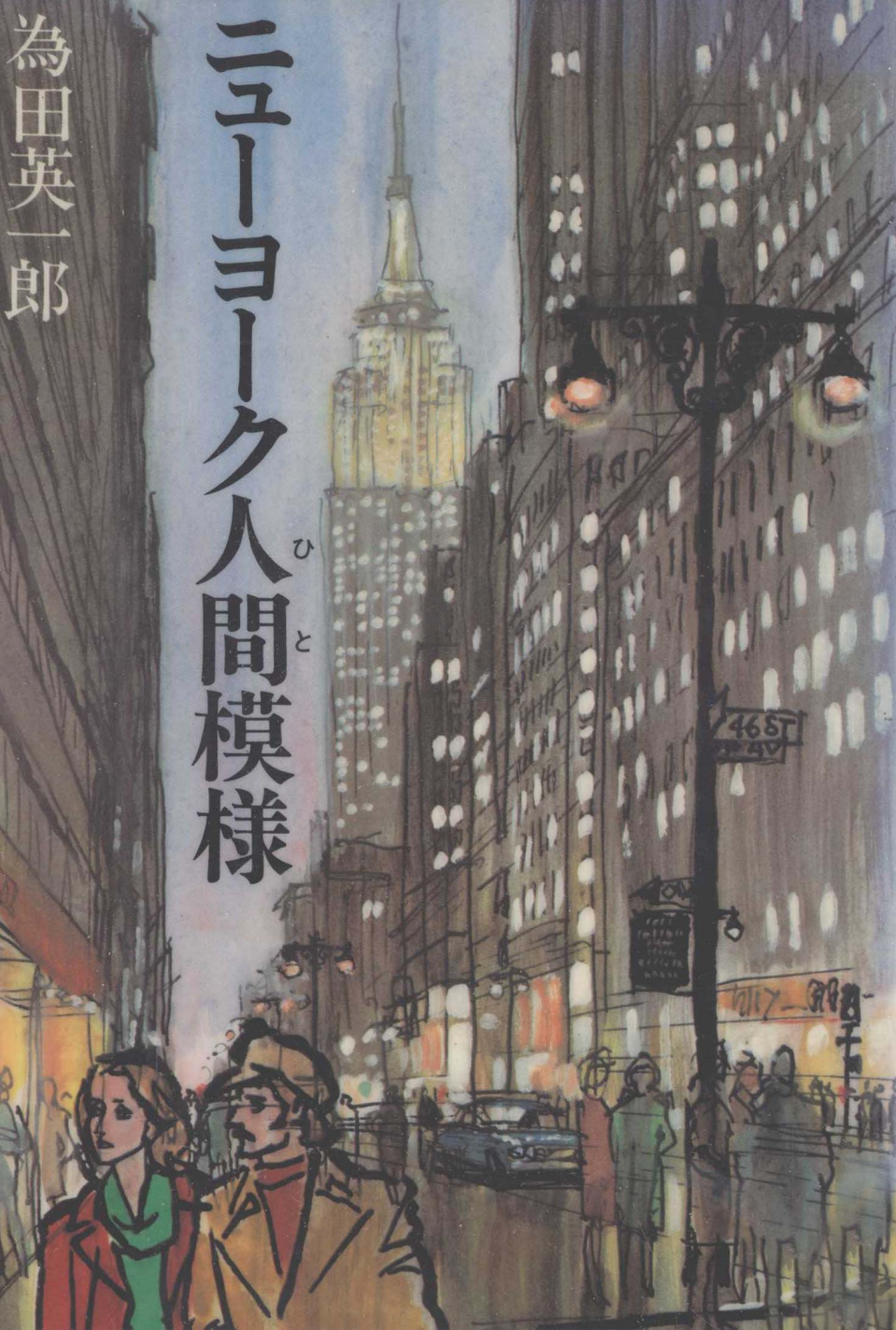
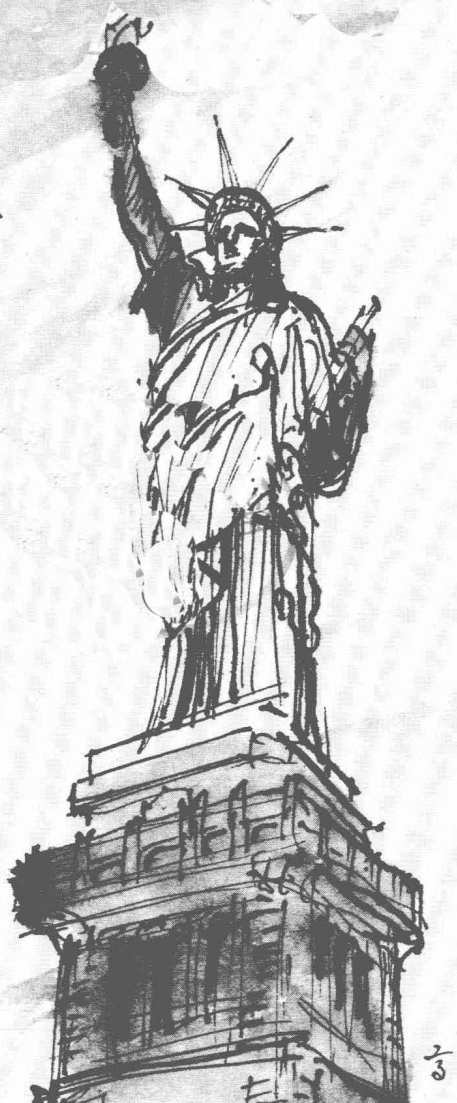
ニューヨーク人間（ひと）模様

為田英一郎



ユーヨーク人間（ひと）模様

為田英一郎



＜著者略歴＞

為田英一郎（ためだ・えいいちろう）

1936年，横浜市生まれ。東北大学文学部卒。

60年，朝日新聞入社。大阪本社社会部をへて外報部。

73年から75年までソウル特派員。

77年からニューヨーク特派員。80年3月帰国。

現在，外報部次長。

著書に『沖縄の孤島』（朝日新聞社＝共著），『韓国——沈黙の底で』（自由企画・出版）などがある。

ニューヨーク人間（ひと）模様

初　版　昭和五五年一二月二五日発行

著　者　為田英一郎

発行者　仙名　紀

発　行　朝日イブニングニュース社

東京都中央区築地七—八—五

電話〇三（五四三）三三二一

発　売　朝日新聞社

（東京・大阪・名古屋・北九州）

定　価　一二〇〇円

© 1980, E. TAMEDA

印刷　広研印刷株式会社

0025-219083-0042

ニューヨーク人間（ひと）模様／目　次

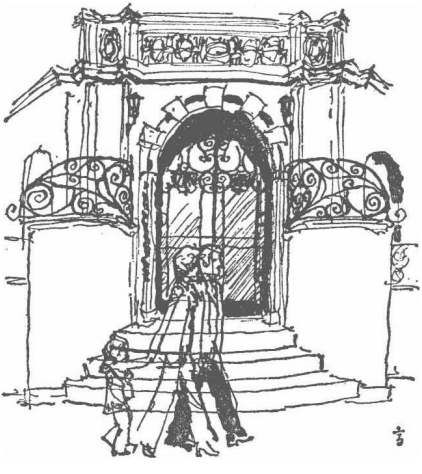
第一章　アメリカ人、その生きざま
トライ・アゲンの都市　7
「個」の思想　15
フットボール雑感　22
哀しき従者　29
情　報――東と西　39
第二章　摩天楼からみた日本
おせっかい社会　51
新「あめゆきさん」考　58
割りバシ考現学　67
知的サロンよ興れ　74
日本外交、敗れたり　81
冬まぢか、われらキリギリス　91
振り向けばわれひとり　102

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

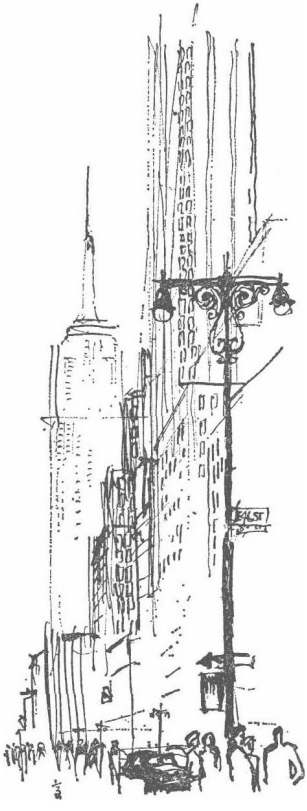
第三章　ニューヨーク、わが歳時記
ニューヨーク、あの町この町　115
ロングランの秘密　129
隣は何をする人ぞ　135
アメリカン・ドリームの崩壊　147
ペニー一枚の重み　155
銃の国、鍵の国　166
第四章　アメリカはどこへ行く
翔ばず、はい上がる女たち　179
告発される産科複合体　190
わたしの咽喉はカラカラだ　203
さよならジョン・ウェイン　221
レーガン氏登場、ひとつの側面　235
「あとがき」ふうの回想ノート　247

装幀
カット　高塚　省吾

第一章
アメリカ人、その生きざま



トライ・アゲンの都市



新聞記者とて、宮仕えの身に変わりのあろうはずはない。そろそろいいだろう、のひとことで帰国が決まった。ニューヨークに住んでちょうど三年。たしかに時期ではある。

あわてたように靴底すりへらして市内のあちこちを回る。近代美術館でゲルニカに別れを告げ、ミュージカルの切符を求め、五番街のバーンズ＆ノーブル書店に行ってノーマン・ロックウェルの特大画集を五五ドルも出して買い、ゲイの集まるクリストファー通りをひやかし、友人の画家が住むソーホーのロフト（倉庫を改造したアトリエ）で飲みあかし……。寿命の尽きかけた患者のまなざしにも似た顔つきで、町をほっつき歩いた。

いざ帰るとなると、なにかえらく大損をしたような気持ちになる。ニューヨークとは、そんな町なのだった。

かたわら、仲よくしてもらった人びとを訪ねてサヨナラをいう。その応対がまた、いかにもニューヨークらしい。

時折、訪ねる市立図書館分館の司書で、未婚の中年女性は目を丸くしていった。

「どうしてそんなに早くトーキョーへ帰らなければならないの。あなた、なにか大きな失敗をしでかしてボスに呼び返されたんでしょ。さあ、話してちょうだい、そのいきさつを」

オフィスの裏、八番街にあるグローサリー（食料品店）のおやじは、インドかパキスタンあたりからやって来た移民の息子に違いない。大雪で事務所に寝泊まりするはめになったとき、とっておきのウイスキーを融通してもらって親しくなったが、その弁もふるっていた。

「夏までなんとか頑張ってみろよ。そのうちオレが仕事をみつけてやるさ」

§

あまり根拠あっての話ではないが、わたしのみるところ、アメリカ全土で二億ちょっとのアメリカ人のうち、八割以上は徹底したニューヨークぎらいのように思える。地方都市に足をのばすたびに「何を好んであんな薄汚れた、騒々しい、犯罪横行の場所に居を定めたのか」と問いただされた。北東部の住人にはユダヤ人が多いことに顔をしかめ、中西部の白人たちはハーレムの近況を聞きながら黒人拒絶症を示し、シカゴの黒人などは逆に貧しい中南米からの移民のおびただ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

しい流入を取り上げて反感をあからさまにする。ニューヨークぎらいの根底には、たしかに人種偏見が横たわっているようだ。

だが、ニューヨークの地べたに、それも物騒きわまりないマンハッタンにはりついて動かない人びとは、ニューヨークの外側は（首都ワシントンであれ、風光明媚、気候温暖のサンフランシスコであれ、トーキョーであれ、パリであれ）、どうにも退屈で死ぬよりほかない土地柄と勝手に決め込んでいるようなもののいい方をする。三年で帰ることになったわたしなどは「移民に失敗したふしあわせ者」とみなすしか考えようがなかったのかもしれない。

では、江戸っ子がそうであるように、パリジャンがそうであるように、ニューヨーカーたちが親子何代かにわたってこの町で暮らしたことを無上の誇りとし、この先も、子々孫々、マンハッタンを永劫の居と定めんと、りきみ返っているかといえば、実のところ、それがそうでない。現に、さきほどのグローサリーのおやじなど、ふだんは「強盗と、高利貸、そして値切り品しか買おうとしないシケた客と……。この都会に住んでいるものときたら、まったくロクでなしばかりなんだから、なさけねえ」とこぼすことしきりなのだった。このおやじにしても、図書館づとめの女性にしても、ニューヨークを愛していることにウソいつわりはないのだが、それに、あまり浮き立った顔もせずこの町を去っていく人間に対しては、なんとか引き止めるためのひと声をかけてやりたいと、あふれるような善意を持ち合わせてもいるのだが、自分自身がニューヨークを最高、最善のものと本気で思っているかという点になると、若干の疑問が残る。おそらく、ここ

が、パリや東京などと異なる最大のポイントなのに違いない。そして、いかにもアメリカらしいところでもあるのだろう。

§

これについて、ニューヨーク大学のアービン・クリストル教授（社会学）は「アメリカの都市は、人びとを集めて、郊外の町へ送り込む交易所だ」といっている。パリなどとは、その構成員の心情が大いに異なるらしい。

教授によると、おおかたのアメリカ国民がみせる都市ぎらいは、実は建国以来のもので、あの時代の指導者たちは（進歩派、革新的だったジェファーソンでさえ）同質的なコミュニティこそが共和制の美徳だと考え、こぢんまりとした規模のコミュニティにおいて、初めて特定の宗教や人種に対する忠誠心に優越する地域社会への忠誠心が育ち得ると信じていた、という。だから、建国の父祖たちは共和制に病菌を持ち込みやすい都市に大いなる危惧をいだき、それがのちになって都市嫌悪にまでエスカレートすることになる。教授は、アメリカ国民は、①昔ながらの農村的価値観を重視し、②都市での生活をきらいながらも、③都市文明の快適な暮らしを楽しみたいとする、の三つで特徴づけられるとし、その郊外居住志向を分析してみせた。アメリカ国民は、「都市なき都市文明」を追求している、ということになるのだそうだ。

図書館司書や食料品店のおやじ。サヨナラを告げに彼らの仕事場に出向いたとき、わたしは、たしか、本社の命令で帰らなければならないことになった、といったはずだ。家族もアメリカ生

活をエンジョイしているし、ほんとはもう少しここで暮らしたかったんだ、などとつけ加えた記憶もある。いや、「帰ったって、定員の三倍もつめ込む満員電車に揺られ、通勤に一時間半。しかも暮らしといえば、ビフテキがニューヨークの三倍、オレンジジュースが四倍。ラクじゃないんだよ」などと愚痴ってみせたような気もする。そんな不幸な生活が待っているのを知りながら、お前はなぜにこの町を捨てようとするのか、という反問が彼と彼女の口から突いて出たのは無理もなかった。

あのとき、もしわたしが「本社はわたしにすばらしいポストをくれた。それはわたしにとってまことにエキサイティングで、しかもチャレンジのしがいのある仕事で、なおよいことに、サラリーは倍以上にもなるんだ（ほんとのところは月給などただの一円だって上がりはしなかった）」とでもいっていたら、二人のことばはもっと違うものになっていたはずだ。「おめでとう。お前はチャンスをつかんだのだな。日本はいいところだとは聞いている。わたしも早くこの町を出て、緑に囲まれた邸宅で、気楽な暮らしをしたいよ」。きっと、そんなことばが返ってきて、肩をひとつ、ドーンとたたかれていたことだろう。話し方によって、ニューヨーク市民の対応はこうも変わる。

チャンスをその手につかんだのか、逃がしたのか。ハッピーな生活が約束されたのか否か。チャレンジしがいのある仕事が待っているのか、それとも失意をいだいて坂をころげ落ちようとしているのか。物差しはただひとつ。まことに明快だ。しかも、他人さまに定規をあてるだけでな

く、自分の生き方にもこれをあてはめる。いまよりもっと挑戦しがいのある、わりのよい商売があれば、さっさと店をたたんで、ほかに移る。「江戸・日本橋にのれんを守って三〇〇年」などという宣伝文句はここでは通用しない。へたをすると、三〇〇年もチャレンジを怠った不精ものの一族がいたのか、などと軽蔑の対象にまでされかねない。

繰り返しになるが、ニューヨーク市民はこのニューヨークをことのほか愛している。パリ、東京、サンフランシスコなどをよく知る人は少ないが、知らぬまま、それらがニューヨークに比べればずっと退屈で、住むに値しない都会だと決め込んでいる。それでいて、グローサリーのおやじのように「わたしも早くニューヨークから出ていきたいよ」などともいってのける。つまり、住むのはいやだが、仕事はニューヨークでつづけたいと望んでいるからだ。たしかに彼らは、クリストル教授がいうように、伝統的に「都市ぎらい」の民なのである。

あれはたしか七八年の夏だった。大統領選に敗れて中央政界から身を引いたフォード氏から手紙をいただいた。サインまでが印刷の、おそらく何百人、何千人の報道陣に配ったであろう書簡だったから、たいして恐縮もしなかったが、文面には「わたしは退任後、公式発言をすることも極力ひかえて著述に専念してきた。かくして、いま、ここにいくつかの論文が用意されたのである。欲しければ売ってあげよう」との趣旨が書かれてあった。当時の副大統領ネルソン・ロックフェラー氏は亡くなったときの事情に女性問題がからんで評判を少々下げてしまったが、あれほどの富豪の出で、自身も「位、人臣を極む」の人物でありながら、公職を退いたあとは、名画の

複製販売事業の準備に熱中し、その疲れが寿命を縮めたといわれる。

両大立者がみせたファイティング・スピリットなどもいささかこの話にかかわりがあるのであって、名を重んじ、体面を保つことに汲々とする日本の知名士のそれとは明らかに違っている。これら成功者たちも、上にのぼりつめたあと、こんどは横に自分の世界を広げようとするのだ。縦に、横に、みなが望みをいだいて動き回る。この緊張のなかで「ニューヨーク文化」というのが生まれる。

§

「町はずれの、坂下のカーブを曲がろうとしたときだった。車がスリップした。ズ、ズ、ズとあらぬ方向に向かう。対向車の青い車体が風のように通り過ぎた瞬間、わたしの車は電柱に体当たりしていた」

ニューヨークの海外新聞普及会社（OCS）は毎年、在留邦人を対象に随筆コンクールをしているが、七七年度の最優秀賞に輝いたのは、交通事故に見舞われた主婦の体験記だった。

大学院生の夫も、受賞者である妻も、学資かせぎのアルバイトに追われる暮らしのなかでのアクシデント。同乗の六歳になる長男は意識不明のまま病院に運ばれ、自宅療養のその主婦は、悲しい、本当に悲しい、とくちびるをかむ。

夫の同級生、近所のご婦人たち、知り合いのアメリカ人たちがかけつけ、マメマメしく働いてくれた。ジャネットもキャロラインも、そのほかの人びともだれもが「トライ・アゲン」（もう一

度がんばるのよ）と声をかけた。

日本の知人たちもこの一家を助けるのに労をいとわない。ベッドから起き上がれないでいるこの主婦にやさしいことばで慰めた。「ドライブはもうご主人にまかせて、あなたはおやめなさいね」。

踏まれても蹴られても、未来にのみ目を向けて立ち上がるアメリカ国民のことば。静かに再起を待ち、危ういことから身を引くことをすすめる日本人のことば。あざやかな二つの生き方をわたしはこのとき知った――と、彼女は書いた。

トライ・アゲン。なるほど、わたしも、ニューヨークに住んでいて、このことばをよく聞いた。アパート近くの小公園で、なんとしても第一歩が踏み出せず、ベンチにしがみついたままの幼な子に、若い母親がさかんにそう声をかけていた。交通事故で足を失い、不なれな車いすで歩道橋のスロープを上がろうとしている少年に、道ゆく人びとは励ましのことばをおくり、失敗して車がずるずる下がるたびに「トライ・アゲン」と叫んでいた。これもまた、ニューヨークの姿である。住人たちは都市ぎらいだが、みな、心はあたたかい。

徹底してニューヨークぎらいの五大湖地方や北西部のアメリカ人たちは、しばしば「ニューヨークは、アメリカにあるが、あれはアメリカでない」といった。いま、わたしは「でもね、ニューヨークのないアメリカはないのだよ」と、連中に切り返してやればよかったとくやしがっている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co